



10年後を見据えた教育支援

女川向学館

震災の被害を理由に、夢や進学を諦めないでほしい
そんな想いで被災地に働きかけたNPO団体と
地域の協働によって開校した、コラボ・スクール「女川向学館」
地域のみんでつくり上げる放課後学校の先には
どんな未来が待っているのだろう



中学3年が卒業前に参加する「やくそく旅行」のグループワークの様子。課題を考える過程で自分と向き合う5日間の東京滞在を通じて、子どもたちは大きな成長を遂げるという。

午後4時過ぎ。町内の中学校を出発した直通スクールバスの第一便が、女川第一小学校校舎に到着した。授業の開始まで、まだ時間はあるが、すでに生徒たちが集まりつつある校内には、明るく元気な声が響いている。
震災後の2011年7月、NPOカタリバが設立したコラボ・スクール「女川向学館」。ここは震災によって学びの場を奪われた子どもたちが安心して学習できるようにと、教育委員会、地域、保護者、NPOスタッフが

協働で運営している放課後学校だ。 教育支援を継続するために 不可欠だった地域とのコラボ

現在、女川向学館に通っている町内の小・中学生は約150人。小学生は1日1コマ、中学生は1日2コマ、週2回、基礎学力を補完する授業が行われている。

「震災後、被災地を回っていた代表の今村は、子どもたちにとって価値のある支援を長期的に行うためには、地域の方とともにやっていく必要があると考えました。その考え方を受け入れ、建物を提供してくれたのが、女川町教育委員会の前教育長だったそうです」と、開校の経緯を説明してくれた広報担当の川井裕子さん。女川向学館では事務系の職員も授業をサポートしているそうで、スタッフは全員、生徒と関わっているという。

ちなみに仮設住宅の平均的な間取りはキッチンと4畳半2間（4人家族用）。同じ生活環境にいる子どもたちは、一様に勉強に集中しづらい状況に置かれている。だが、ここに来れば、勉強ができるだけでなく、友だちと会うこともできる。授業を受け持つ先生のキャリアもさまざま。学力の補完、居場所

づくり、そして多様な価値観との出会いの延長線上で、子どもたちにみずから学ぶことを通じて未来を切り拓く力を育んでもらいたい。そんなコラボ・スクールの想いに、教師を含めた地元の人びとが共感した。
「当初は、勉強したってどうなるの」と学ぶ意欲を失いかけていた子どもたちが、話を聞いてもらえる環境ができたことで少しずつ変わっていききました。震災という悲しみを乗り越えることで、本当の強さ、優しさを身につけてゆく。そんな彼らの中から、10年後の日本にイノベーションを起こす人材を輩出できればと、女川の子どもたちのためにいちばん

よい教育は何か、日々模索しています」
女川向学館の基本は、まずは自分で考えること。大人たちは彼らの自主性が芽吹くよう、見守り、働きかける。震災直後、減少した子どもたちの放課後の学習時間は、震災前と比べても1時間ほど増えた。勉強をすることで何かが変わるという希望を持ち始めた子どもたちは、これからの町を担う力を着実に身につけ始めている。
(塚田恭子)



母親の実家が石巻で、石巻日赤病院で生まれた川井さんは、会社をやめて女川に来たという。子どもたちが1000年後の防災対策を真剣に考え、町に対して発表したのを見たときには、「素敵なあなたたちに混ざってください」という気持ちになったそうだ。



【上】女川をはじめ、被災地の多くの子どもたちはスクールバスの送迎で学校と家を往復している。まだ放課後、自由に移動できる環境ではない。

【下】女川向学館は、震災直後、避難所となった女川第一小学校1階で授業を行っている。校舎の正面には、仮設住宅が並んでいる。

コラボ・スクール 女川向学館
〒986-2321 宮城県牡鹿郡女川町浦宿浜字門前4
女川第一小学校仮設住宅前校舎1階
TEL 080-2820-5558 FAX 0226-25-9360
HP <http://www.collabo-school.net/>
E-Mail pr-tohoku.katariba.net